

土佐日記「帰京」 (紀貫之)

①京に入り立ちてうれし。家に至りて、門に入るに、月明かければ、いとよく京に入り立ちて…京に足を踏み入れて。ありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは、たよりごとに物も絶えず得させたり。今宵、「かかること。」と、声高にも言はせず。いとほしく見ゆれど、志はせむとす。中垣…隣との境の垣。さるは…それでも。

②さて、池めいてくぼまり、水漬ける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ交じれる。大方のみな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人もみな、子たかりてののしる。かかるうちに、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさとぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、また、かくなむ。たかりて…群がり集まって。心知れる人…気持ちを理解してくれている人。妻を指すか。見し人の松の千年に見ましかば…松のように千年も

③忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、とく破りてむ。とまれかくまれ、とく破りてむ…ともかくも必ずすぐに破り捨ててしまおう。

〈予習〉

調べた語句	本文中の意味	調べた語句	本文中の意味

この文章について他のグループの人に伝えるため、左の内容を完成させよう。(現代語訳ではないので、内容が分かるように説明できていれば良い)

①京に戻ってうれしい。自分の家に着いて、門に入ると、()。聞いていたのよりもまして、()。家に

預けておいた留守番の人の心も、()。中垣はあるが、()。

()。従者たちの不満げな声を抑え、()。それでも、()。水がたまつて池のようになってる所のほとりに()があった。その一部は()。

②水がたまつて池のようになってる所のほとりに()。だいたい荒れているので、人びとは「ああ(ひどい)。」と言う。(それを見るにつけても)()。同じく帰京した人たちにも子どもたちが群がり集まって騒ぐ。こうしているうちに、()。

()という歌を詠んだ。()という歌と()

③忘れられず、残念なことも多いが、書き尽くすことができない。ともかくこの日記は破り捨ててしまおう。

